

太田部の花輪踊りを訪ねて —秩父山村と女子大生の交流—

新井幸恵（著）（2014年3月、まつやま書房）

人間福祉学科 宮城 道子

本書は、秩父市太田部（おおたぶ）を訪ねた学生たちの学びの記録である。2007年度から2012年度までの6年間に、人間福祉学科8学年の約50名の学生を中心に、「にこにこ農園」サークルや、生活情報学科泉ゼミ・食物栄養学科名倉ゼミの学生たちも参加している。

秩父市旧吉田町にある太田部は、群馬県境の過疎化と高齢化が進んだ山村集落である。それだけでは、マイナスイメージを与えかねないが、豊かな自然・文化・歴史をもつ山里である。学生たちが太田部を訪ねて学んだものは、高度経済成長以前の日本ならば、それぞれの個性はあるものの、至るところに当たり前存在した人々の暮らしぶりである。その当たり前暮らしの豊かさが、もはや失われつつあり、語り伝える人々さえ少なくなっているということは、日本という国の不幸ではないかと思う。過疎対策だけでなく農山漁村活性化は、国の政策としても取り組まれてきた。最近ではグリーンツーリズムや食農（育）教育、六次産業化などの話題としてマスコミが取り上げることも増えた。しかし、ようやく多数派である都市住民の関心が向けられ始めたとはいえ、すでに「限界集落」が多いことも事実である。

そのような中、学生を受け入れてくださった太田部の皆さんには心から感謝したい。日本の伝統的コミュニティは閉鎖的であるという定説は、条件つきに変えなければならない。その土地の人々が大切にしているものに共感し、尊敬の念をもって教えを求める者を受け入れる農山漁村の懐の深さは、限りがない。学生たちがその懐に飛び込んでいくことができたのは、道筋を示した新井先生のご指導があつてのこととは思いますが、当たり前の暮らしを大切に思う人々の思いを感じ取ることができた学生たちの感性も素晴らしいと思う。

地域外からの訪問者が地域を理解するためには、まずは知識から入らざるを得ないが、その地域への愛着が欠かせない。愛着が生じれば知識欲が膨らみ、さらに知れば知るほど愛着が増す。その意味で新井先生から太田部のことを知り、関心を持った学生たちが行ってみたいと感じたとき、早速行動したことによって、その後学生から学生へと関心と知識と愛着が連鎖していったのだと思う。その土地の風や水に触れ、その土地が育んだものを体感すること、知識と経験が一致するということは、実践の学問を学ぶ者には貴重な経験である。

太田部の皆さんと学生の交流の中で、花輪踊りが復活したことは、大きな成果である。単なる「伝統文化の復活」ではなく、「独自の新しい伝統の成立」であるということは、すでに萩原昌好先生が序文で指摘されており、私もまったく同感である。

地域活性化をめざす現場では、「若者・よそ者・ばか者」の存在が貴重とよく言われる。行動力があり、時を超えて受け継ぐ者としての若者、当たり前前の事物を新しい視点で評価できるよそ者、そして「○○ばか」と呼ばれるほどの情熱をもつ者ということである。私は常々、その三者のいずれにも女性が位置づくべきだと思ってきた。事実、女性は同時にその三者の役割を担える可能性が高い。学生たちが、太田部の皆さんにとってそのような存在であったのなら、嬉しい限りである。そのような役割を果たすことで、学生たちも、かけがえのないもう一つのふる里を得たのだと思う。

昨年末に後輩の学生たちが届けてくれた太田部育ちゆずマーマレードの優しい味を楽しみながら、この交流の持続と展開を心より願うものである。